

■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 45号



空港拡張問題で注目すべき西海岸に残された自然リーフ、大嶺海岸 (撮影：翁長 均)

沖縄の環境問題(3) 赤土汚染によるサンゴの死滅	桜井 国俊
「本物」の沖縄、どこへ行く?	翁長 均
沖縄島の人工ビーチ造成ラッシュと沿岸生物多様性の劣化	名和 純
「民主党が目指す真の国民のための政治の実現を宣言 沖縄で菅代行」	真喜志 好一
森があった	今泉 真也

【特集】ついにCOP10開幕! 「沖縄BD市民ネット」の活動紹介

《環境情報おきなわ》

沖縄の環境問題（３） 赤土汚染によるサンゴの死滅

桜井 国俊（沖縄環境ネットワーク世話人）

2008年9月10日付朝日新聞朝刊は、1面トップで「サンゴ7割消えた」というセンセーショナルな見出しで日本最大のサンゴの海である石西礁湖（石垣島と西表島の間のサンゴの海）で2003年から2008年の5年間に7割のサンゴが死滅したことを報じました。このことの持つ重大な意味を、本土の人々は果たしてどこまで理解しているのでしょうか。

劣化する自然の防波堤

ご承知の通り沖縄は台風銀座に位置しています。地球温暖化の進行と共に海面が上昇し（那覇では過去40年で11.8cm上昇）、台風が大型化する中で（その典型例が2005年にルイジアナを襲ったハリケーン・カトリナ）、極めて憂慮されるのが沖縄を台風から守る自然の防波堤であるサンゴ礁の劣化が近年極めて激しいことです。このトリプルパンチで沖縄は、気象災害に極めて脆い島になると危惧されます。サンゴはプランクトンや魚のゆりかごであり、その劣化は漁業の衰退のみならず観光産業にも大きく影響しますが、それに加えて防災面での影響も忘れてならない点です。

サンゴ礁劣化の原因の一つは海水温の上昇によるサンゴの白化現象であり、世界各地の海を襲った1998年の白化では沖縄も甚大な被害を被りました。そして上に紹介した朝日の記事にもあるように、白化現象の勢いは止まる気配がないのです。

ところで海水温の上昇に加えて劣化を加速しているのが、赤土汚染とオニヒトデの異常繁殖であり、いずれも沖縄での人間活動が原因です。世界的に有名な石垣島の白保のサンゴが、流出する赤土の堆積によるストレスで白化していることを報じたのは地元紙沖縄タイムスの2002年11月20日付夕刊でした。今回は沖縄における水汚染問題で最大の問題となっている赤土汚染について見てみることにします。

農地からの流出が主たる原因

沖縄県では1972年の本土復帰以降、様々な本土型開発事業が行われましたが、開発地域から降雨時に赤土が流出し、サンゴ礁や河川・沿岸海域の生態系に著しい影響をもたらしました。この問題はメディアが広く取り上げるところとなり、沖縄県特有の環境問題として県民に広く認識されるようになりました。モズク養殖や沖縄の自然豊かな観光資源である「青い海」への経済的な影響が懸念されるようになったこともあって、沖縄県では1995年に「赤土等流出

防止条例」を施行することとなりました。

この条例が規制対象としているのは1000㎡以上の土地改変を伴う開発事業であり、それまで主たる発生源であった開発事業からの赤土流出は一定程度抑制されることになりました。しかし、開発事業と同様に主たる発生源である農地での対策は努力義務とされた結果、農地では十分な対策が実施されるところにまで至っていません。このことから、現在では、全赤土流出量のうち70%が農地からのものであると推定されています。

土地改良事業で加速する赤土流出

戦後の沖縄では、水田からサトウキビへの転作が急速に進みました。これは砂糖生産地の台湾が植民地でなくなったこと、キューバ危機で国内産糖の需要が更に高まり政府の糖業政策でサトウキビ栽培が儲かる農業になったことなどが原因です。この水田消失が赤土流出を招くこととなりました。また、日本復帰後に実施された高率補助金による土地改良事業が、赤土流出を更に加速させました。琉球王朝の三司官（宰相）であった蔡温は、現場視察をもとに農務帳（農業マニュアル）を著し、一枚一枚の畑ごとに溜をつくり流出土砂を沈殿させ、溜まった土を畑に返すことを農民に徹底させました。農業機械の導入を可能とすることを主たる目的に実施された土地改良事業は、こうした蔡温以来のきめ細かな農業のやり方を根本から変えることとなったのです。

農家は、梅雨や台風時に耕地がむき出しにならないような方法（株出し）でサトウキビの耕作を行ったり、パイナップル畑に敷き藁を敷いたり（マルチング）、あるいは畑の下端に月桃を植えて（グリーンベルト）土壌の流出を防止するなど、様々な赤土流出防止対策を講じています。しかし零細規模の農家が多く、手間や経費のかかる対策は十分に講ずることが出来ないのが実態です。

そこで高根や著者らが、沖縄の「青い海」を守る目的で農家の赤土流出防止の取り組みを支援する環境直接支払制度を沖縄県で導入する案について県民に問う調査を実施したところ、この目的のために世帯当たり年間1,609円の税負担をしても良いとの結果が得られました。県民の意識は相当に高いと言えます。

「本物」の沖縄、どこへ行く？

翁 長 均（自然体験活動指導者）

飛行機に乗る時はきまって窓側の席に座る。特にしばらく沖縄を離れていた時などは、故郷の海を早くこの目で確認するために雲が切れると同時に窓に額を押しつけた。那覇空港が近づくと機体は大きく旋回し、エメラルドグリーンサンゴ礁が目に飛び込んできく。その時、滑走路の南側に小さな島がぼつんと浮かんでいるのが見えるのをみなさんはお気づきだろうか？ その島は本島と海中道路でつながっており、休日にはビーチパーティやキャンプを楽しむ家族連れであふれ、夕方から夜にかけては恋人たちの格好のデートスポットとなる。海岸から見る夕日は絶景だ。飛行機の離着陸を間近に見ようと観光客も多く訪れる。ウィンドサーフィンを楽しむ人、釣り糸をたらす人、ただ海辺に座り物思いにふける人、様々な人がそれぞれ思い思いの時間を過ごす憩いの島だ。わずか周囲1.5kmの小さなその島は「瀬長島」と呼ばれる。

自宅に近いこともあり、子供の頃から慣れ親しんできた瀬長島であったが、ある日リゾートホテル建設の話が持ち上がっていることを知った。この夏工事着工とのこと。ああ、ここもか。ショックだった。あまり知られていないが瀬長島にはその昔「グスク」が存在した。伝承では琉球の創世神アマミキヨが降り立ったといわれ、現在も島内には多くの拝所が散在する。戦前までは集落があり多くの人が暮らしていたが、戦後米軍に接収され1977年に返還されるまで弾薬庫として使用されてきた。そんな文化的・歴史的に重要な島を、沖縄の財産を、「観光」のために潰すそうだ。

瀬長島の北側には広大な干潟が広がっている。空港に隠れているため知名度は低いですが、那覇に残る唯一の自然海岸「大嶺海岸」。空港の滑走路を沖合に拡張する計画があり、この海も埋め立ての準備が着々と進められている。

「せめて最後にその姿を記憶しよう。」

友人達と瀬長島、大嶺海岸を探索するツアーを企画。7月の大潮の日、干潮にあわせ瀬長島から大嶺海岸を縦断するツアーが始まった。瀬長島にはよく遊びにきていたが、正直、大嶺海岸を歩くのは初めてだった。カラッパやミナミコメツキガニといったユニークなカニ達が出迎えてくれた。みんな夢中になり全然前に進めない。彼らの誘惑を振りきり、沖のリーフを目指す。砂地はどんどん白くなり、広大

な海草藻場が広がっていた。カメの食み跡も見つけた。その昔、大嶺の民がジュゴンを飼っていたという伝説も残っているほど豊かな海がそこにはあった。振り返ると、遠くに緑豊かな瀬長島が小さく見える。いつの間にか飛行機の爆音も全く聞こえなくなっていた。波の音も消えた。一瞬どこにいるかわからないくらい別の世界にいる気がした。遥か西、水平線に浮かぶ慶良間諸島まで歩いていけるのではないかと錯覚してしまうほど干上がったサンゴ礁がどこまでも続いていた。海の真ん中にいるはずなのに海が見えなかった。

先程まで気づかなかったが、リーフに近づくにつれ、釣りをする人、貝やウニ、タコを採る人の姿が多くなっていた。まだこの干潟を生活の一部として利用している人がいるのだ。リーフ際にはハマサンゴを初めとした塊状サンゴのマイクロアトール群体が並び、元気なミドリイシの仲間も多数見られた。イソギンチャクの触手の間にはクマノミの幼魚が隠れている。那覇にこれだけの自然が残っていることを知っている人はどれだけいるだろう。

気づくと出発してから5時間以上が経過していた。「観光立県沖縄」の目玉となるはずのサンゴ礁の海を多くの観光客を呼ぶために埋め立てる。島の各地で自然海岸を埋め立て、見た目だけきれいな人工ビーチがどんどん増えていく。何も知らない観光客は偽物の海で遊び、満足して帰っていく。辺野古は埋め立て反対と話題になるが、その他の海岸は問題になることもなく、いつの間にかコンクリートに代わり、防波作用を失ったサンゴ礁の上にテトラポットが並ぶ。

「歴史」も「文化」も葬られ、コンクリートジャングルに変わる。私たちはただ四角くなっていく沖縄を見ているだけなのか。「最後の姿を目に焼き付けよう」としか言えないのか。ある友人はこう言った。「子供つれて（人工）ビーチに行ったけど潮引いて泳げなかったさ〜。」

何を仰る。潮が引いた日こそ子供と海を楽しむ最大のタイミング。子供は何時間でもそこを動かない。思い出の中に「本物の沖縄」を残してあげたい。そうすれば沖縄も何か変われるのではないかな。

そろそろ朝日が昇る。今日も時間を見つけて瀬長島に行ってください。

沖縄島の人工ビーチ造成ラッシュと沿岸生物多様性の劣化

名 和 純 (貝の渚を歩く会)

沖縄島の海岸線をたどっていくと漂白されたように真っ白な砂浜が次々と現れる。そうした浜は、立派な駐車場やトイレが整備されていて、どこも同じような突堤に囲まれた「規格浜」だ。そんな人工ビーチが沖縄の子どもたちにとっての海の写真風景になりつつある。今、ウチナーンチュが家族で海水浴に行く浜は、ほとんど人工ビーチではないだろうか。それもそのはず、沖縄島にはいつのまにか人工ビーチが38か所も造られているのだ(図1)。そのほとんどが2000年代以降に造成されたビーチだ。さらに、計画中の人工ビーチが10か所以上ある。こうした人工ビーチ造成ラッシュは、沖縄の海辺を「沈黙の渚」に変えつつある。その総延長は、約18kmに及んでいる(筆者調べ)。こうした状況が生物多様性(生物生息環境)に及ぼしている影響のごく一端を報告する。

人工ビーチ造成が生物生息環境に及ぼす影響

1. 浚渫海域の生物生息環境の破壊

沖縄の人工ビーチの砂には、白っぽい小さな貝殻が多量に混じっている。これらの貝類は、浚渫海域から砂とともに運ばれてきたもので、水深30~60mの沖合砂底域を生息環境とする種群である。この種群は、慶良間諸島沖の砂底に特有の貝類群集として知られている。慶良間諸島とチービシの間の海域では、長年にわたって海砂浚渫が行われ、沖縄島の人工ビーチ砂のほとんどを賄ってきた。筆者は、沖縄島27か所の人工ビーチでチービシ沖の貝類の殻を確認している。その種数は300種近くに及ぶ。こうしたことから、慶良間諸島沖の生物多様性に富んだ生物生息環境が、人工ビーチ砂浚渫によって大規模に破壊され続けていると考えられる。

2. 造成場所の生物生息環境の破壊

人工ビーチは、自然海岸や半自然海岸を埋め立てて造るものと、埋立地先端などの人工海岸に作られるものとに分けられる。前者の場合、陸域と海域の生態系をつなぐ海岸移行帯(エコトーン)が破壊される。人工ビーチの造成は、陸側にコンクリートの仕切り(護岸)を打ち込み、その前面を敷石した土台で固め、その上に養浜砂をかぶせて施工される。その結果、海岸移行帯が幅広く埋め立てられ、そこを生息環境としている移行帯特有の生物相が消滅する。また、陸域から海岸潮間帯に湧出する滲出水の水脈が分断されるため、湧水に依存している汽水性の底生生物(貝類、甲殻類など)個体群も消滅する。例えば、読谷村宇座浜では、人工ビーチ造成により海岸移行帯の湧水域を生息場所としていたリュウキュウムシロやマスオガイなどの絶滅危惧種の貝類が個体群ごと消滅している。

3. 周辺海域の生物生息環境の劣化

人工ビーチの砂は、台風時や海の荒れる冬期に大量に流出する。特に、冬期には多くのビーチで砂の大半が流亡し、土台の敷石が露出するほど深くえぐられて、無残な姿をさらしている。その漂砂が周辺海域の海草藻場やサンゴ礁にシルト(泥)化して堆積し、底質を還元化(ヘドロ化)させている。その結果、貝類などの底生生物が死滅する。砂は流出するたびに大量に補給され続けるため、人工ビーチは周

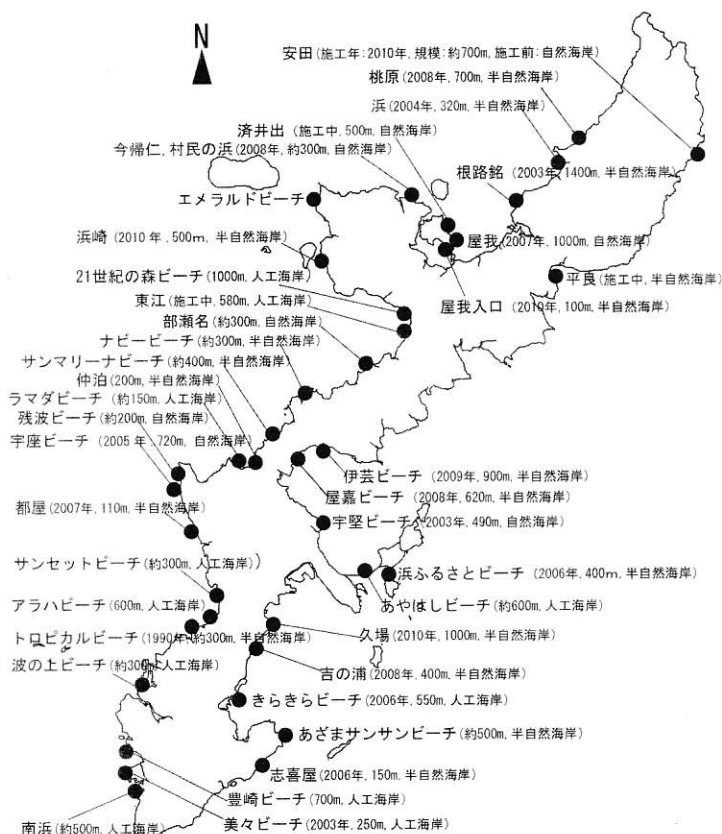


図1. 沖縄島の人工ビーチ (2010年)

人工ビーチ名に続けて施工年(完成年)、規模(長さ)、施工される前の海岸環境を列記した。これらのデータは、「琉球諸島沿岸海岸保全基本計画」(沖縄県土木建設部港湾課)からの引用および筆者の調査結果に基づいている。なお、護岸および突堤工事を伴わない養浜のみのビーチは、この図には含めていない。

辺海域への「汚染源」となっていく。

おわりに

沖縄島の人工ビーチは、養浜事業として高潮や海岸侵食対策などの防災名目で作られてきた。それが近年は、自然再生のための「エココースト事業」と称して海岸植物を植え、オカヤドカリを放流する人工ビーチが造られ出した。それは、一見すると自然海岸と見紛うほど巧妙に作られている（偽装自然?）。だが、こうした自然再生型人工ビーチも本来の海岸生物生息環境を生き埋めにして造られることに変わりはない。そして、慶良間諸島沖の海底には、生物の死に絶えた巨大な穴が広がっていく。人工ビーチ造成ラッシュは、沖縄島沿岸域の生物多様性を急激に劣化させて続けている。だが、その実態はほとんど把握されていない。



養浜工事の進む済井出浜（2010年9月）

「民主党が目指す真の国民のための政治の実現を宣言沖縄で菅代行」

真喜志 好一（沖縄環境ネットワーク世話人）

■普天間は「移設」ではなく「閉鎖」を

危険な普天間飛行場の閉鎖を日米両政府が合意したのは自民党政権下の1996年12月であった。翌97年、移設先を名護市辺野古に決めたが、97年12月21日の名護市民投票で反対の民意を示した。にも関わらず、日米両政府は辺野古を狙い続けている。

2009年夏の衆院選では、民主党代表として選挙応援に来沖した鳩山由紀夫は、「最低でも県外」と力説し、その結果、沖縄の4選挙区で自公候補はすべて落選した。沖縄では「最低でも県外」、つまり、危険な普天間を県内に「移設」するのではなく「閉鎖」が実現することに期待がかかっていたが、辺野古沖へのV字案という自公政権が交わした日米合意に5月28日には舞い戻り、鳩山氏から菅氏に総理大臣が変わった。

■新総理大臣の所信表明演説と県民の反応

菅直人総理大臣は6月11日の所信表明演説の最後の方で、普天間基地移設問題で次のように表明した。

『沖縄は、独自の文化を育んできた、我が国が誇るべき地域です。その沖縄が、先の大戦で最大規模の地上戦を経験し、多くの犠牲を強いられることとなりました。今月23日、沖縄全戦没者追悼式が行われます。この式典に参加し、沖縄を襲った悲惨な過去に想いを致すとともに、長年の過重な負担に対す

る感謝の念を深めることから始めたいと思います』

このように表明して来沖し、「戦没者追悼式」に参加した菅総理を迎えた横断幕には「菅直人総理・感謝はいらぬ・普天間基地持って帰れ!」と書かれていた。私もまったく同感だ。



■民主党は沖縄での演説（公約）を守れ

ところで、本論表題は民主党公式サイト<http://www.dpj.or.jp/news/?num=16901> 2009年8月24日の記事の見出しである。当時の菅代表代行が沖縄で行った演説を報じたものである。一部を書き写す。

——菅代表代行は自公政権について「沖縄の問題解決の壁になってきた」と指摘。沖縄県の皆さ

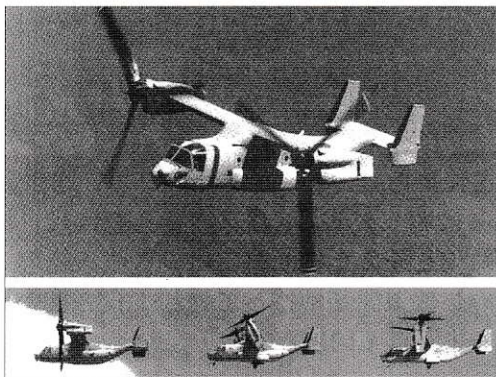
んの声を正しく政治に反映していないところに最大の問題があるとしたうえで、民主党は、沖縄県の声をついに聞いたうえで政策を練り、実行していくと表明。――

「最低でも県外」との発言や、「民主党は、沖縄県の声をついに聞いたうえで政策を練り」との発言を忘れず、実行に移してほしい。

■オスプレイ配備は1996年に決まっていた・事実を掘り起こせ

幹部人事は自公政権から引き継いだままであった。北澤防衛大臣をグアムにエスコートした高見澤防衛政策局長の姿をテレビで見て驚いた。何しろ高見澤氏は、「オスプレイ配備を隠すように」との趣旨の日本政府の要請書を在日米軍司令部に1996年11月に届けた人物なのだ。

オスプレイとは、エンジンの向きを変えて、ヘリコプターのように飛んだり、飛行機のように飛べる航空機である。



■高見澤防衛政策局長のウソ

写真には1996年11月27日の日付がある文書で、米国でのジュゴン訴訟に米国防総省が提出した文書の一部である。一枚目は在日米軍司令部が作ったアメリカ大使館などにあてたカガミ文で「普天間海兵隊飛行場の移転に関する日本政府の考え」との表題で次のように続いている。

以下の文書は防衛庁のタカミザワ氏から在日米軍／j3へ渡されたものです。

一つ目の文書（2ページ目）はSACO最終報告案に対しての彼の文案です。

二つ目（3～4ページ目）は最終報告に関する個別の説明文書だそうです。

三つ目（5ページ目）は沖縄へのMV-22配備に関する質問想定だそうです。

何か質問があればご連絡を。

つまり、2枚目以降は、日本政府が作成した文書である。この文書を届けた「タカミザワ」氏を取材

した琉球新報2009年4月21日の過去記事「配備念頭に日米協議 普天間代替オスプレイ」を読んでいた。 <http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-143460-storytopic-3.html>

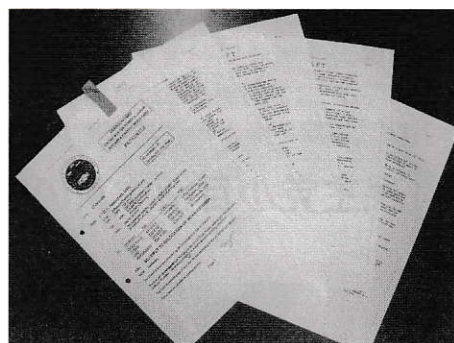
記事から、高見澤氏との一問一答を書き写す。

――文書にある『ミスター・タカミザワ』とはあなたか。

「私でないと言うのは難しい」

――この文書は知っているか。

「米国が内部文書として作成したものだ。私が文書を作り米国に渡したのではない。他国が作成した内部文書について、その内容が当たっているとか間違っているとか、政府としていちいちコメントする立場にない」（傍線・マキシ）



高見澤氏の答の傍線部分は公僕として許せない大ウソである。カガミ文以外の四枚は、高見澤氏が在日米軍司令部に届けた日本政府作成の文書である。文書を届けたことは記憶している高見澤氏が、これらを「米国が内部文書として作成したものだ」と答えることは許されない。

■辺野古海上基地建設を白紙撤回せよ

質問想定を表題は、「那覇防衛施設局から沖縄県および地元への説明のためのQ&A(MV-22関連事項)」となっている。十三項目の想定質問事項の中に、「沖縄のどこにMV-22を配備するのか」、「MV-22の飛行パターンはどのようになるのか？」などがあり、日本政府が1996年11月時点でオスプレイの配備を熟知していたことを明かす文書である。2007年8月に公告縦覧された「方法書」への沖縄県知事意見「対象事業に係る飛行場の使用を予定する航空機については、想定されるものも含め具体的な機種及び数を明らかにすること。」に沖縄防衛局は答えていない。新政権は、旧政権のウソで塗り固められた辺野古海上基地を白紙撤回すべきだ。

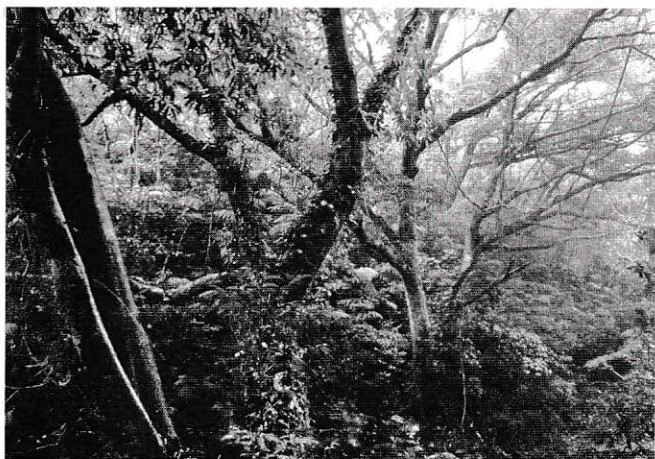
森があった

今泉 真也 (写真家)

風景は幾層にも重なり合っている。僕たちの心の中にも。

1997年、僕はひとつの森と出会った。それはこの島の上にあった。この島の上にあるということは、この海の上にあるということであり、この星の上にあるということだ。僕たちはものを考えるとき、しばしばこのことを思い出すべきなのだろう。

森は、川や岩や多くのものたちの集合体だ。そして、そこにそのころ僕もいた。



朝6時ごろ目が覚める。時間の概念は森の命ずるままだから、時計の表示とはちがう。

テントの中で、夜から浸けておいた飯と豆に近くの草を入れ、弱火で炊く。アルコールバーナーの燃料が終わるころ、静かにご飯が出来上がっている。味噌か醤油、それにすりゴマをのせ、食べる。残りは昼夜兼用の弁当だ。一日2食で十分だった。



森の音が降っている。テントの中でもマダラコオロギが昨夜の名残を奏でている。シュラフの下にいたらしいアオヘビがゆっくりと去っていく。僕のからだも徐々に起きだす。

7年、雨がくるのを待っていた。雨水を受けとって森が息づくのを見たかった。水に満たされた写真が、積み重なっていった。

十数年がたち、森はダムになった。美しいダムに。ひとは水が好きだ。やがて他のみずうみのように、こどもたちがしぶきをあげ、色とりどりのカヌーが満面の笑顔を乗せるだろう。

僕たちの心の中にある風景は、幾層にも重なっている。



【特集】 ついにCOP10開幕！「沖縄BD市民ネット」の活動紹介 ほか

～ 10/24：フォーラム「沖縄の生物多様性の危機／COP10議長国で何が起きているか」(桜井国俊) 他 ～

■「沖縄BD」これまでの活動概要 ■

2009年7月25日に結成されて1年間で6回、のべ40日間の展示会を開催。会員の写真家たちを中心に、大浦湾、やんばる、奥間川、高江、泡瀬干潟、辺野古のみならず離島からも大集合。県主催や東京での写真展にも出展。実際に森へ海へ出て自然と触れ合う「遠足シリーズ」や、小さな学習会「ノレッジカフェ」などワークショップも主催。他にも、フォーラム、出前講座、様々な会合での活動紹介、環境省や沖縄県など行政へ提言文書提出・要請などの取り組み、生物多様性条約市民ネットワークや国内外NGO、関係機関や団体との連携、国際会議への参加、そして各団体の陳情支援、イベントの共催、後援、協賛など会員活動の支援を行ってきました。沖縄のこれまでの「環境」「平和」「人権」の取り組みがこの国際会議をきっかけにネットワークとしてつながる素晴らしい機会となりました。

■『生物多様性COP10(名古屋)』での取り組み ■

- 10/18～29 ブース出展：名古屋国際会議場・屋外広場
 - 10/21(木) HSM*：熱田生涯学習センター
 - 10/22(金) シンポジウム/沖縄の歌と踊り：天白文化小劇場
 - 10/23(土) 舞台「フクギの雫」：天白文化小劇場(昼夜公演)
 - 10/23(土) HSM*：名古屋学院大学体育館
 - 10/24(日) フォーラム(講演：桜井)：名古屋学院大学体育館
 - 10/26(火) フォーラム：名古屋学院大学体育館
- *HSM=ホットスポットターズミーティング(全国大問題会議)

◆ 問：「沖縄・生物多様性市民ネットワーク」 ◆

「NPO法人 奥間川流域保護基金」事務所内
〒901-2213 沖縄県宜野湾市志真志4-24-7
セミナーハウス304号
TEL/FAX 098-897-0090 090-2516-7969 (吉川)
e-mail: okinawabd@gmail.com
HP: <http://www.bd.libre-okinawa.com>

【ブックレット好評発売中】※ご注文は、「沖縄大学地域研究所」まで→連絡先は下記参照。

『沖縄の豊かな生物多様性を守るため、未来に繋げるため (Part1 & 2)』

沖大土曜教養講座として開催した「3.13地域戦略フォーラム」「6.6事例報告+桜井講演」の記録を編集発行。巻末資料充実！(各500円)

環境情報おきなわ (2010年9月～2010年12月)

【祝！】 沖縄人権協会理事長 福地曠昭様(当会顧問)が「琉球新報賞」を受賞!! (9/29)

■ 沖縄環境ネットワーク・共催イベント ■

第465回沖縄大学土曜教養講座・生物多様性シリーズ
Part3/日本森林生態系保護ネットワーク森林シンポジウム

「オープンミュージアム！ やんばるの森のまか不思議～やんばるから考える日本の森林と生物多様性～」

日 時：10月2日(土) 午後2時～6時

会 場：沖縄大学 3号館101教室

主 催：日本森林生態系保護ネットワーク(Confe Japan)
沖縄大学地域研究所

〈問〉「沖縄大学地域研究所」 chiken@okinawa-u.ac.jp
TEL：098-832-5599/FAX：098-832-3220

◆ 沖縄環境ネットワーク世話人会(参加自由!) ◆

日 時：お問合せ下さい

場 所：沖縄環境ネットワーク事務所

年会費：個人会員：3,000円 学生会員：1,500円

家族会員：3,000円 団体会員：10,000円

特別賛助会員：100,000円

郵便振込先：(口座番号) 02010-9-20132

(加入者名) 沖縄環境ネットワーク

【訃報】 元琉大教授・公庫副理事長 久場政彦様(当会顧問)のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申しあげます。(9/26)

◆【書籍販売】 郵送します! ◆

◎『沖縄の環境と平和』 1,000円

◎『低周波音公害調査報告書』 500円

◎『沖縄から世界へ』 1,000円

◎『沖縄からコスタリカへ～平和憲法とエコツーリズムの旅』 1,000円

◎『沖縄型・回分式酸化溝のすすめ』 500円

◎『沖縄のエコツーリズムの可能性』 1,000円

事務局 (098-989-1348) までお問合せ下さい

沖縄環境ネットワーク通信・第45号

2010年9月30日発行

発 行 〒904-0031 沖縄市上地1-21-13

沖縄環境ネットワーク

TEL 098-989-1348/FAX 098-989-1346

PHS 070-5492-3890

E-mail/info2009@oki-kan.net

<http://oki-kan.net/> (準備中)

発行人 桜井 国俊/編集 久保山 顕子